

愛媛県鬼北町における座敷雛の発祥と地域的特色

池田彩乃*・淡野寧彦**

*四国名鉄運輸, **愛媛大学社会共創学部

本稿は、愛媛県鬼北町における座敷雛がいかにして発生し、その後の中止と復活を経たうえで地域行事の一つとして継承されてきた過程を分析した。これらにより、鬼北町の地域文化としての座敷雛の特徴や役割を明らかにすることを目的とした。

八幡浜市真穴地区が発祥とされる座敷雛は、20世紀前半に、同地区と鬼北町旧広見町の住民との間での婚姻関係の成立により伝播した。1990年代になって、きほく座敷雛保存会のメンバーが座敷雛展示を復活させ、その造園技術やメンバーの継続的確保などによって、座敷雛展示は次第に鬼北町における代表的な地域行事の一つとして定着した。さらに、道の駅での展示の開始や、鬼北町内外の組織と連携したイベントの実施など、座敷雛展示の拡大や継続は、地域に活力を与える一助として貢献した。

メンバーの高齢化を理由に、2019年にこの活動は終了したが、座敷雛展示は25年間にわたって継続されたことに加え、約100年前の地域間交流や人の往来を浮き彫りにしたことも評価されるべきである。

キーワード：雛祭り、座敷雛、住民活動、文化伝播、愛媛県鬼北町

I はじめに

今日の日本においては、地域振興を企図したさまざまな事業が全国各地で展開されている。観光を通じた地域振興への期待はその代表的な一つであるが、単に大勢の観光客が訪れる、いわゆるマストツーリズムの形態だけでなく、住民が主体となって地域の魅力を（再）発見・評価する観光まちづくりなど、多様な手法が取り入れられている。こうした取り組みは、単に経済的な効果にとどまらず、交流人口の増加や、住民の地域への愛着向上などに結びつく要素を持っている（深見・井出、2010：3-12）。また菊地（2018：212）が指摘するように、観光の醍醐味は、地域資源を掘り起こし、それらを保全しながら活用し、持続的な地域振興に結び付けることである。一時的な盛り上がりにとどまらない、地域の価値や魅力を構築することは、地域やそこに住む人々にとって重要なテーマであろう。さらに、従来の温泉観光地が

停滞に直面するなかで、岩間（2017）は城崎温泉の観光まちづくりに注目し、観光業とは関わりのなかった住民や企業を、祭礼行事を用いた人間関係の構築によって取り込むことが、新たな地域活性化に結びついている実態を明らかにした。ほかにも、芸術を軸としたイベントを通じて、国内外から多くの観光客を獲得している例として、2010年より瀬戸内海地域で開催されている「瀬戸内国際芸術祭」が挙げられ、観光客への意識調査からは、高い満足度や再訪意欲がみられた（山本ほか、2014）。

地域の歴史や文化を活用した親しみやすい行事として、雛祭りを題材とした取り組みも各地でみられる。雛祭りは従来、家庭内で行われるものであるが、現在では、特定の地域内に多数の雛人形を展示したり、地域独自の雛人形や展示方法をアピールしたりするなどによって、多くの観光客が来訪する現象がみられる。こうしたイベントは1990～2000年代に広まり、全国で130以上のイベ